



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	博物館等施設における学習の視点：旭山動物園のワークシートを事例として
Author(s)	品田, 早苗
Citation	Sauvage：北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 4, 61-68
Issue Date	2008-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35675
Type	departmental bulletin paper
File Information	Shinada.pdf



博物館等施設における学習の視点

——旭山動物園のワークシートを事例として——

品田 早苗

はじめに

現在、博物館等施設では様々な教育活動を行っており、最近ではその中でも特に学校教育に関する活動に関心が集まっている。学校教育への対応の一つとして、教材の提供があり、ワークシート作りも様々な施設で取り組みが行なわれている。しかしながら、博物館等施設利用時の学校教育のニーズがどこにあるのか、博物館等施設の関係者はいまいち把握しきれていない。よって、博物館等施設側が考えるものと、学校教育側のニーズの食い違いが生じているため、それぞれの施設でワークシートの作り方を模索し続けている。ということは、博物館等施設の学校教育利用時に求められるものについて、博物館等施設側と学校教育側との学習の視点の相違が少しでも明らかになれば、お互いに歩み寄ることが可能となり、博物館等施設側が学校教育側の求める内容を盛り込んだワークシートの作成の可能性が広がるのではないかと。もしそれが可能となれば、学校教育における博物館等施設の一層の利用拡大にもつながる。

そこで、今回はワークシートに着目し、記述スペースのある無料配布されているワークシートに限定して、その使用状況を調査する。今回、調査対象を無料配布されているワークシートに限定するのは、施設を訪れれば誰もがワークシートを手に入れることができる状況がどの程度あるのか、その状況を調査するためである。調査によって現状を踏まえた上で、具体事例として、ワークシートを作成している旭川市旭山動物園を取り上げる（以下、旭山動物園と略す）。旭山動物園を題材として、動物園関係者が作成した一般見学者向けワークシートと学校関係者が学校教育での使用を目的として作成したワークシートを比較することにより、同一の動物園を利用した場合の学習に関してのそれぞれの認識を明らかにし、その学習の視点の違いについて分析・考察することとする。

1. ワークシートに関する概況調査報告

(1) 調査概要

まず、日本国内の博物館・動物園・水族館・美術館・科学館・企業博物館等施設におけるワークシートの使用状況について調査をした。調査対象は施設内において無料で配布されている記述式ワークシートとし、調査項目は①ワークシートの有無、②ワークシートに関する事柄（配布方法・設置場所、種類、大きさ・用紙の種類、使用対象年齢、質問形態、使用範囲、事前・事後指導の有無等）、と設定した。

調査期間は1992年から現在までの約16年間、調査を実施した地域は北海道・青森県・東京都・愛知県・京都府・奈良県・滋賀県・大阪府・福岡県・長崎県・沖縄県の11都道府県である。調査を実施した施設は、累計72ヶ所である¹。訪問施設の内訳は、博物館47ヶ所・美術館10ヶ所・科学館5ヶ所・水族館4ヶ所・動物

園 3 ヶ所・企業博物館 3 ヶ所である。その中で、ワークシートの使用が確認された施設は、北海道開拓記念館、北海道大学総合博物館、東京都江戸東京博物館、国立民族学博物館、国立国際美術館、奈良国立博物館、北九州市立自然史・歴史博物館の 7 ヶ所である(以下それぞれ、記念館、北大博、江戸博、民博、国際美術、奈良博、北九州博と名称を省略する)。ワークシートの使用が確認された施設は全体の 9.45%で、それらの施設はすべて、2003 年以降に調査した施設であった。科学館・水族館・動物園・企業博物館ではワークシート使用例は見られず、またワークシートの有無について、地域の偏りは特に見られなかった。

(2) ワークシートの形態について

ワークシート使用施設の状況をまとめたのが、表 1 である²。はじめに、配布場所・配布方法については、既成の机や専用の台等を用いてスペースを確保し、利用者がワークシートを自由に利用できる状態にしている施設が多かった。しかし、記念館・江戸博では資料保護の観点から施設内の照明が一部薄暗い所もあり、見学者が気付きにくい薄暗い場所にワークシートが置かれていた。それに対して国際美術では、施設入口の明るい案内カウンターの上に置かれていたが、他館のチラシと一緒にラックの中に置かれ、手に取らないとワークシートであることに見学者は気がつかない状況であった。特異な事例では、奈良博で施設職員が入場時にワークシートをチラシと一緒に見学者へ手渡ししていた。ワークシートの種類については、1 種類のみ施設は北大博・奈良博・民博・国際美術の 4 館であった。そのほか、江戸博では 2 種類、記念館では 3 種類、北九州博では 4 種類のワークシートが確認された。また、ワークシートの種類が複数ある施設では、使用対象年齢や内容の難易度を変え、ワークシートの種類を揃えている事例が見られた。ワークシートの大きさは、A4 サイズを使用していることが多く、1 枚の用紙に片面印刷または両面印刷したもの、もしくは両面印刷をしたものを 2 つ折にして使用している事例が見られた。用紙の種類は、コピー用紙や厚紙のような厚みのある用紙を使用している事例が見られ、統一した傾向は特に見られなかった。

ワークシートの使用対象年齢については、明記されていたのは北九州博の「幼児用」があるのみであった³。しかし、ワークシート内の漢字にルビをふっているものが多いところから、低年齢層も対象としているであろうと推察されるものが複数見られた。質問形態は、展示物を見学し、その中から答えを探す一問一答型または多肢選択型の出題方法が多かったが、一部に展示物を観察して感想を書かせる質問も見られた。使用範囲については、常設展を範囲にして全域を探さないと答えが見つからないような、施設全体を回遊させる内容が多かった。しかし北大博と民博では、特別展・企画展のみを使用範囲としてワークシートが作成されていた⁴。また、ワークシート利用者を対象に(事前・活動中・事後)指導をしている事例は見られず、ワークシートの問題の解答や解説を掲示していたのは奈良博と北九州博のみであった。

(3) 分析

以上の調査結果から、博物館等施設で使用されているワークシートの特徴は、「既成の机や専用の台を利用して場所を確保して置かれており、見学者は自由に使用できる状態にあるが、設置されている場所は利用者にはわかりにくい場合が多い。種

類は1種で、A4サイズのコピー用紙もしくは厚みのある用紙に、片面または両面に学習内容が印刷されている。使用対象年齢は特に明記されず、漢字にはルビがふられていることが多い。一問一答もしくは多肢選択型の質問方法を用い、常設展示全体を回遊させるような内容で作られているが、施設側からの事前・活動中・事後指導は特にない」という風に、まとめられるであろう。

ただし、文章に専門用語や難しい表現をそのまま使い、それにルビをふっているだけなので、低年齢でも理解できるような表現方法等の工夫をしているかの判断は難しく、ワークシート作成者が想定しているような低年齢層が、ワークシートの内容を理解できるかは疑問が残る。さらに、ワークシートの利用を見学者に促すようなポスター掲示等の周知活動は、どの施設もワークシート設置場所以外ではほとんどされていなかった。

表1 ワークシート使用状況

調査項目	調査結果
ワークシート 使用館	記念館、北大館、江戸博、民博、国際美術、奈良博、北九州博
配布場所・ 配布方法	所定の位置に専用の台を設置—記念館、北大博、江戸博、民博、国際美術、 北九州博 係員が入場口で手渡し—奈良博
種類	1 種類—北大博、民博、国際美術、奈良博 2 種類—江戸博 3 種類—記念館 4 種類—北九州博
大きさ・用紙の種 類	A4 サイズ 1 枚 (片面印刷)—北九州博 A4 サイズ 1 枚 (両面印刷)—奈良博 A4 サイズ 1 枚 (両面印刷・2 つ折)—民博、記念館 A3 サイズ 1 枚 (両面印刷)—北大博 変形—江戸博 (蛇腹式)、国際美術 (ブック式・B5 サイズ)
使用対象年齢	区分あり—北九州博 (「幼児用」の明記あり) 区分なし—北大博、民博、奈良博、記念館、国際美術、江戸博
質問形態 ※1	一問一答型—北大博、民博、奈良博、北九州博、記念館、江戸博 多肢選択型—北大博、北九州博、記念館 文章記述型—国際美術 クロスワードパズル型—北九州博 スケッチ型—記念館
使用範囲	常設展示・施設全体回遊型—記念館、江戸博、国際美術、奈良博、北九州 博 特別展・企画展のみ一点集中型—北大博、民博
指導 ※2	解答・解説を掲示—奈良博、北九州博 指導なし、または不明—北大博、記念館、江戸博、民博、国際美術

※1 ワークシートの種類が複数ある施設は、すべてを掲載している。

※2 事前・活動中・事後指導、すべてを調査対象とする。

2. ワークシート作成活動事例

上記のように、博物館等施設では様々な工夫を凝らし、ワークシートを日々の教

育活動の中に取り入れている。では次に、学校教育での利用にとり組んでいる具体事例として、旭山動物園におけるワークシート作成活動を取り上げる。

(1) 旭山動物園で使用されるワークシート

現在の旭山動物園では、ワークシートを園内で無料配布せず、動物園公式ホームページ上でワークシートのデータを公開し、利用者がデータを自由にダウンロードできる環境を整えている⁵。ワークシートの種類は概況調査で判明した他館に比べてとても多く、「内容はクイズ形式、課題達成型、学習型、ポケット図鑑などがあり」、「目的を持って楽しみながら園内を回るワークシート」を目標として作成している（旭川市旭山動物園 2007：114）。用紙の大きさは、基本的にはA4（一部A3）サイズを想定して片面印刷のデータがつくられているが、印刷する際に利用者の状況に合わせて縮小・拡大の変更が可能であり、用紙の素材も印刷時に自由に選択できる。

ワークシート使用対象年齢は、特に明記されていない。しかし、漢字にはルビをふる配慮がされている。質問形態は、展示物から答えを探す一問一答型、もしくは多肢選択型を用いている。使用範囲は、常設展示の他に、施設内の階段数・自動販売機の絵柄など展示物に直接関係はないが、ユニークなものも含まれている。質問形態は、施設全域をくまなく歩きながら答えを見つけるようなものになっている。指導については、特には何もされていなかった⁶。

以上のように、概況調査で見られたワークシートの特徴と旭山動物園で提供されているワークシートの特徴とでは、用紙サイズ、使用対象年齢の記載がない点、質問形態、施設全体回遊型である点、指導は特にない点など、共通点は多かった。

それでは次に、旭山動物園を題材に学校教育で使用する目的で作成されたワークシートについて報告する。

(2) 学校教育向けワークシートの作成経緯

もともと旭山動物園のワークシートは、「教育活動の一環として当園ホームページにワークシートを掲載し、自由にダウンロードできるようにして」あったが、「学校の教育課程を特に意識したものでは」なかった⁷。そこで、2008年1月に学校教育での利用を目的としたワークシート作成が企画された。実際にワークシートを作成したのは、旭山動物園教育研究会（以下、GAZEと名称を略す）の会員を中心としたワークショップ参加者たちであった⁸。

GAZEとは、「学校と動物園が融合し、こども達に動物のすばらしさを伝える」ことを目的として、「学校と動物園双方が融合した教育活動の在り方を探る、大学、学校、動物園の三者間の合議組織」である⁹。主に会員を対象として、ワークショップ・研修会の開催、カリキュラム作り・共同研究などの活動をしている。2008年1月に行われた第6回ワークショップは、参加者の「皆様が当園のワークシートを見返し、ワークシートを新たに作成してもらおう」と学校教育用のワークシート作成を目的として企画された¹⁰。参加者は、旭川市内の小学校・中学校等の教員が約8割を占め、そのほか大学生・大学院生らが参加しており、参加者を便宜上、4つのグループに分けてグループごとに使用対象年齢の異なるワークシートを作成した。

(3) ワークシート作成活動

ワークショップが行なわれた結果、数種類のワークシートが作成された。この内

容を元に、学校教育での利用を想定したワークシートを新たに作成し、動物園公式ホームページに掲載される予定で現在作業が進められているので、ワークシートの詳細はここでは割愛し、概況調査の項目に沿ってみていくこととする。

まず、ワークシートの配布方法・設置場所については、GAZE 事務局より旭山動物園公式ホームページでの公開を想定していることが説明されていたので、今回は討論されなかった。ワークシートの大きさ・形態については、A4 サイズで一枚完結型、片面または両面を利用して、すべてのグループがワークシートを作成した。

ワークシートの使用対象年齢は、「学校教育向けで、発達段階ごとに使用できる新たなワークシートを作成できればと思っています」という GAZE 事務局の意向により¹¹、小学校低学年・中学年・高学年と中学生以上の 4 つにあらかじめ区分し、それぞれの作業グループで分担して作業したので、特に討論はされなかった。質問形態は、一問一答・多肢選択型は低学年のグループで一部用いられたのみで、大半が文章記述型を用いていた。ほかには、動物の体の一部をスケッチさせる質問があるものもあった。使用範囲については常設展示を取り上げており、小学校低学年は 2 種類の動物、小学校中学年は 4 種類の動物などと、活動時間・能力等を考慮して 1 枚のワークシートで調査する動物の数にも配慮をしていた。指導については、指導方法を含めたワークシートの使い方が考えられており、その方法は、事前・活動中・事後すべての時にあわせ、大まかな指導案までワークショップ内で考えられていた。

3. ワークシートの内容比較・分析

では、動物園・ワークショップそれぞれで作成したワークシートを比較・分析する。

ワークシート使用対象年齢については、動物園は能力を区分基準として考えていたようであるが、ワークショップでは GAZE 事務局の意向により、年齢別のワークシートを作成した。しかしその点に関して参加者から、学年が上がるにつれて同学年の中でも学力差が顕著になるので、学年での区分のほかに、授業内容を一通り網羅する内容の「さらっと型」と、授業内容に深く踏み込んだ内容の「しっかり型」など、児童・生徒の能力に合わせたワークシートを同一グループに対して 2 種類以上、用意することを望む声が出ていた。

質問形態については、動物園は一定時間内に見学者が答えを見つけられないのではないかという配慮から、一問一答型や多肢選択型の質問形態を用いていたが、ワークショップでは文章記述型やスケッチ型が多く用いていた。小学校低学年でもそれなりに文章を書くことが可能のようで、ワークショップに参加した教員たちの「児童・生徒になるべく文章を書かせたい」という意向が働いたようである。

使用範囲については、常設展示を扱うことについて相違は見られなかった。動物園は園内全体の動物を対象にして質問を用意し、園内をすべて回ることを意識してワークシートを作ったという。それに対してワークショップでは、現地活動で完成させることのできる内容・分量のワークシートを作ることを意識して、学習・調査対象とする動物の種類を限定していたようである。また、ワークシートを使った活動にかかる時間は、動物園では半日もしくは一日を想定しているに対し、ワークショップでは 1 時間もしくは半日を想定していた。

指導については、基本的に何も指導しない動物園に対し、ワークショップでは授

業の一環として動物園見学が組み込まれているため、事前・最中・事後すべてにおいて指導プランを考えながらワークシートが作成されていた。

以上のように、同じ題材で作成されたワークシートであっても、学習の視点が異なれば様々な相違点が見られることがわかった。

4. 考察

ワークシートの内容を比較・分析した結果、以下のようにまとめられる。

まず、動物園が作成したワークシートは、使用対象年齢は幼児から老人までの幅広い年齢層を想定しており、所要時間は半日から一日で、施設全体を見て回ることを促すような内容で構成され、質問形態は一問一答もしくは多肢選択型で作成された施設全体周遊型といえる内容であった。これは、動物園が社会教育施設、もしくはレクリエーションの場の一つとして機能しており、ある程度の時間を費やして老若男女が楽しめるようなワークシートの内容が求められているからなのではなかろうか。

その一方で、ワークショップで作成したワークシートは、使用対象年齢は学齢児童・生徒層を想定しており、所要時間は1時間から半日程度、各学年の授業内容にあわせて施設内の一部を題材として取り上げ、質問形態は文章記述型・スケッチ型を取り入れた見学展示限定型の内容を考えていた。これは、時間等に制限のある児童・生徒の利用に合わせ、活動範囲を予め限定して効率よく学ぶことができるよう誘導しているのではなかろうか。

動物園が今まで作成してきた一般見学者向けのワークシートと、教員が参加者の大半を占めるワークショップで作成したワークシートには、学習の視点を基準にしても様々な違いが見られ、ワークシートの形態を比較しても様々な違いがある。この現状を踏まえた上で、利用者の利用状況・ニーズに合わせ、ワークシートを作成していく方法を模索する必要があるであろう。

今回のワークショップでは、公式ホームページでの公開を前提としていたので、ワークシートの設置場所・配布方法については議論されなかった。しかしその裏側には、園内にワークシートを置いておくと、使用するか否かに関わらずとりあえず手に取り、ところ構わず捨てる見学者が少なくなく、経費をかけてもゴミになるという悪循環があって園内では配布できないという、動物園側の事情が隠れていた。この「ワークシートのごみ化問題」については、同様の話を北九州博の職員のインタビューでも得ており、配布場所・配布方法については、今後の検討課題の一つといえる。

おわりに

今回は、動物園と学校教員を多く含むワークショップ参加者が持つ、学校教育における「学習の視点」について、旭山動物園を事例とした調査をした。この二者間におけるワークシート利用想定者や理想とする利用方法の違いを踏まえた上で、今後どのようなワークシートが求められているのか、さらに具体事例を積み重ねて調査が必要であろう。

また今回の調査は、施設内で無料配布しているワークシートに限定して進めてきたが、調査対象外でも、ワークシートを見学者に提供している情報を得ている施設

もある。さらに、希望する学校に対して学校教育用ワークシートを指導者向け解説付で提供している施設や、教員用ガイドブックを作成し配布している施設、施設の活用方法についての教員向けセミナーを毎年開催している施設など、様々な形で学校教育での利用を促す活動をしている施設もある。また、子ども向けのワークシートを販売している施設もある。このように、まだまだ調査すべきものがあるので、これからも調査を継続していきたい。

品田早苗
北海道大学大学院国際広報メディア観光学院 国際広報メディア専攻
博士後期課程

謝辞

今回の調査に際し、GAZE 主催のワークショップ参加者の皆様、特に GAZE 事務局の奥山英登氏、佐賀真一氏、田嶋純子氏にご協力いただきました。ここに記して、心から深謝いたします。

(参考文献)

旭川市旭山動物園監修 2005 『幸せな動物園』ブルース・インターアクションズ
旭川市旭山動物園 2007 『旭山動物園の動物図録』旭川振興公社
旭山動物園くらぶ 2006 『いますぐ行きたい!あさひやま動物園ガイドブック』
改訂版 北海道新聞社
加藤有次・椎名仙卓編 1990 『博物館ハンドブック』雄山閣出版
品田早苗 2007 「博物館等施設におけるワークシートの使用状況について」『総合
的学習における博物館活動：博物館での活動と実践を中心として』2006 年度北海
道教育大学岩見沢校若手研究支援経費研究報告書 北海道教育大学岩見沢校
日動水教育指導部編 1995 『飼育ハンドブック(4)』(社)日本動物園水族館協会

註

- ¹ 同一の施設を調査しても、調査日が異なるとワークシートの有無が異なる場合がみられたので(例えば奈良博では、2003 年以前はワークシートが配布されていなかったが、2003 年以降ではワークシートが配布されていた)、今回の調査では訪問回数で件数を数えることとした。
- ² ワークシートそれぞれの詳細については、(品田 2007)参照のこと。
- ³ 北九州博では、「幼児用」ワークシート以外には使用対象年齢が明記されていなかった。しかし、ワークシートの専用配布台の掲示板にはそれぞれのワークシートの使用対象年齢が例示されていた。
- ⁴ 北大博では、博物館実習で学生が作成したワークシートを配布していた。
- ⁵ 旭山動物園のワークシートの詳細については、旭山動物園公式ホームページ(参照 URL : <http://www5.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/> 最終閲覧日 2008/02/29)を参照のこと。

⁶ 旭山動物園関係者からの聞き取り調査で、2007 年の市民感謝デー(旭川市民無料入園日)に、ワークシートを配布して午前と午後各 1 回ずつ、野外ステージで解答と解説を行ったことが判明している。

⁷ 参照 URL: <http://www5.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/> (最終閲覧日 2008/02/29)

⁸GAZE 主催のワークショップは、会員以外の参加も認められている。旭川市内の小中学校にも案内が送付され、また動物園公式ホームページにもワークショップ開催の案内が掲載されている。

^{9・10・11} 参照 URL: <http://www5.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/> (最終閲覧日 2008/02/29)